

## トレードオフ

第15期生 野口 裕貴

「小野ゼミに入ったことは、正しい選択だっただろうか。」

卒業を目前に控え、自分の大学生活を振り返り、評価していく中で、“ゼミ”というものにも順番が回ってきた。思えば、私が小野ゼミに入った第一の目的は、「自信をつける」ことであった。入ゼミ説明会で対応していただいた自信溢れる先輩の姿に憧れ、自分も社会人になる前にこんな自信を持ちたい。そう感じ、小野ゼミに入会した。先輩のような自信を持つためには、なんらかの結果を出さなくては。そんな志を胸にスタートを切った大学3年生であったが、結果は挫折の連続だった。5月のインカレディベート直後のKUBICでは、全くもって、これといったアイデアを出すことができず、早速壁にぶち当たった。6月から開始された論文活動では、最初こそ順調だったものの、夏休みに入ろうかという頃には、チームは小規模化し、仮説は決まらず。“仲良し”だった私たちのチームに暗い雰囲気が漂ったのも、一度や二度のことではなかった。人間関係においても、幾度かの難局を経て、なんとか11月の本番を迎えた。慶應マーケティング・ゼミ合同研究報告会では、僕個人で言えば、緊張からかこれまでで一番ひどいプレゼンになってしまった。次の日の関東学生マーケティング大会では、パフォーマンス自体はまずまずのものだったと思うが、結局プレゼン賞はおろか論文賞も獲得することは叶わなかった。それまで、多大なるご指導を頂いてきた小野先生、大学院生の方々、第14期の先輩方に顔向けできない結果である。これらのことから言えば、自信など持ち得るはずもなく、当初の目的を達成できたとは言い難いだろう。

しかし、私は今、このゼミに入るまではなかった自信をたしかに持っている。それは、これまでの活動の道り、そのものによるものだ。「重要なのは、結果ではなくプロセスだ！」などと陳腐なセリフを言いたくはない。だが、活動にかけた熱量や時間は、他のどんな大学生にも負けていないと信じている。連日23時まで学校に残り議論を重ねた。夏休みも、冷房の効いたグループ学習室に籠っていたおかげで、夏の暑さを感じることなく過ぎ去った。カラオケは、歌ってストレスを発散する場所ではなく、深夜に作業するための場所であった。これらはどれも、小野ゼミ生の常識であり、“ふつう”の大学生の非常識であろう。だが、“ふつうでない”ことにこそ価値があり、その経験があるからこそ今の自信を持つことができている。だから、冒頭の問いに対しても、間違いなく“YES”と回答できる。経済学部生である私は、ゼミ選び際、最初に経済学部の有名ゼミのブースを訪れた。その時、そのままそのゼミに入っていたら、“ふつう”の大学生になり下がっていたことであろう。

最後に、この2年間、私を人間として成長させてくれた同期、大学院生の方々、先輩方、後輩達、そして私たちのために多くの時間を割き、丁寧に指導して下さった小野先生に、心より感謝致します。